

# 令和4年度 学校評価 学校関係者評価書

学校名	三木市立三樹小学校
-----	-----------

## 1 学校教育目標

	志をもち ころろ豊かに たくましく生きる三樹っ子の育成 ～ 笑顔・挑戦・感謝 ～
--	---

## 2 本年度の重点目標

- 1 家庭・地域から信頼される安全・安心な学校
- 2 自他の良さを認め、互いに尊重し合える学校
- 3 志を持ち、たくましく、ねばり強く歩む学校
- 4 自己の可能性を限ることなく学び続ける学校

## 3 自己評価結果(達成状況)【 A:達成している B:概ね達成している C:あまり達成していない D:達成していない 】

評価の観点	評価項目(取組内容)	取組(達成)の状況	評価	改善の方策
学習指導	○ 基本的な学習習慣の確立 ・姿勢改善、学習準備等の学習規律の確立 ・「家庭学習レベルアップ週間」や自主学習ノート指導による家庭学習の推進 ○ 基礎学力の定着 ・チャレンジタイムや読書活動、スピーチ活動、放課後学習等による基礎・基本の力の定着 ・「やさしい日本語」を活用した全ての児童にわかりやすい学習環境の推進 ○ 学び合い高め合う児童の育成 ・「主体的・対話的で深い学び」の習得をめざした授業づくり ・タブレットを活用した個別最適な学習の充実 ○ 9年間のつながりのある指導に向けた研究の実践	・チャレンジタイムに「腰骨タイム」を取り入れたことで、落ち着いた雰囲気を持続したまま朝の学習に取り組めた。 ・中学校のテスト期間に合わせた「家庭学習レベルアップ週間」で、自主学習ノートの掲示を行った。 ・キュビナを活用したドリル学習により基礎的基本的な学力の定着を図った。 ・「やさしい日本語」研修会の開催や情報の提供で、教職員の共通理解とわかりやすい学習環境づくりを進めた。 ・児童、保護者アンケートから「わからないことがあれば、自分で調べたり、家の人や先生、友達に聞いたりして、進んで学習すること」に課題があることがわかった。 ・キュビナやコラボノート、スカイメニューなどのICT機器を活用した新しい授業形態、「個別最適な学び」「協働的な学び」の充実や、主体的で対話的な深い学びを実現する授業づくりについては、今後、実践事例も参考にしながら取組を進めていく。	B	・チャレンジタイムでの「腰骨タイム」は今後も継続し、授業での正しい学習姿勢にもつなげるよう指導を行っていく。 ・課題が見られた児童、保護者アンケートの「わからないことがあれば、自分で調べたり、家の人や先生、友達に聞いたりして、進んで学習すること」については、学習計画の作成法やタブレットを活用した学習の仕方等も指導することで、個別最適に自ら学べる児童の育成をめざす。 ・キュビナやコラボノート、スカイメニュー、officeの活用事例を知り、教職員間で共有することで、ICTを活用した基礎的基本的な学力向上に取り組む。 ・「個別最適な学び」「協働的な学び」の充実させるため、研修会の開催や具体的な授業の提案をし、新しい学習形態についての共通理解を進める。 ・9年間の学びを見据えて、各分野に特化した教職員が校内研修の講師を努め、専門性を高める。
人権・道徳	○ 自分の大切さとともに、他の人の大切さを認めることができる学級・学校づくり ・全校生が参加できるじんけん集会の工夫等による、思いやりに満ちた人間関係の構築 ・国際理解、多文化共生教育の推進 ・実践的指導力の向上に向けた研修の充実	・1学期には「自分自身のよさ」、2学期には「周りの人への貢献」と、視点を整理して全校的な取組を実施した。いずれも教師による劇を取組の導入とした。保護者参加型の新たな試みも行った。 ・じんけん参観では全校生共通の資料を使い、身近な人権について考えた。 ・多文化共生講座や、長期休業中の「心ほっこりタイム」の取組の継続で、自己肯定感や共生の心を育むよう努めた。	A	・社会状況、子どもたちを取り巻く状況の中でも、誰ひとり取り残さない、多様性と包摂性のある学校風土を構築するための取組を今後も進める。 ・職員研修は性同一性障害や性的指向・性自認に係る児童生徒に対する対応等について実施した。今後、道徳授業ならびに道徳教育に関する研修の充実を図る。 ・国際理解や多文化共生のための取組も継続して行う。
特別活動	○ よりよい学校生活の創造 ・感染症対策を講じながらの学級(学年)活動や学校行事の充実 ・自らの学校生活を向上させるための意欲や態度の育成 ・ICTを活用した発信の工夫 ○ ふるさと三樹づくり ・ファミリー活動等を通じた本校独自の企画 ・児童会が主体となった活動の充実	・多くの学校行事を感染症対策を講じながら実施した。児童も満足感を感じ、保護者の方も子どもの成長を感じておられることがうかがえる。 ・ファミリー活動や委員会活動、クラブ活動、学級での係・当番活動についても、感染状況を見ながら行った。児童会活動では、『手形アート』や、さまざまな『チャレンジ週間』、『あいさつ運動』など、学校を盛り上げる活動を実施した。 ・児童集会では、朝の挨拶の仕方で良い例と良くない例を児童会が示し動画で撮ったものを児童に発信する等、新たな方法を試みた。全校生にも気づきが生まれ、あいさつ励行のきっかけになったと感じる。	A	・授業参観や学校行事全般において、感染症の状況を見極めながら実施を検討し、児童の達成感や達成感につなげていきたい。保護者の行事への参加も工夫し、家庭の理解を得られるようにする。また、タブレットを活用した発信の工夫を今後も行っていく。ネットモラルも含め、配信の工夫等についても理解を深めていく。 ・感染症の状況にも注視しながら、児童会活動の自主性を生かした取組をさらに進める。 ・地域の方との交流の中で、「ふるさと三樹」を意識した教育活動が展開できるよう工夫する。 ・地域の施設見学等の充実を図る。
生活指導	○ 児童の内面理解 ・児童の成長につながるあらゆる場面での機を逃さない声かけ→自己肯定感を高めるための取組 ○ いじめや不登校、ネットトラブル、感染症への差別や偏見等の未然防止に向けた組織的な対応 ・家庭や関係機関と連携し、共通理解を図りながら、組織的かつ一体的に行う取組 ○ あいさつの励行 ・地区児童会での活動を効果的に用いるなど、児童会、教職員一体となった全校的な取組	・登校時など、多くの地域の方に子どもたちへの声かけをしていただいている。また、児童会を中心に朝のあいさつ運動を継続して行い、児童・保護者・教職員アンケートでは、「できている」という回答が微増した。一方で、まだまだ改善の余地も見られる。 ・学期ごとのいじめアンケートの時期を見直し、早期対応できるように個別面談等の期間を長く設定し取り組んだ。 ・いじめや不登校事案については、全教職員の共通理解のもと、家庭とも連携し早期対応に努めた。 ・ネットトラブル対応のために、「ネット利用教室」を活用した。 ・コロナへの差別や偏見が無いよう、全教職員で取り組んだ。	B	・「笑顔であいさつできる三樹っ子」を目指し、今後も継続した取組を進める。 ・日ごろの児童観察を大切にし、また、いじめアンケート等を効果的な時期に実施・活用することで児童の内面を理解し、開発的・予防的な指導と迅速な対応に努める。 ・道徳科や学級活動をはじめ、日々の教育活動すべての場面で自他を大切にする心を育んでいく。 ・いじめ・不登校については、日ごろから保護者との連携を密にし、また、教職員間のつながりを大切にすることで、早期発見、早期対応に努める。関係機関とも連携を密にしながら組織的、継続的な取組を進める。
特別支援教育	○ 個々のニーズに対応した支援体制の充実 ・児童理解研修での共通理解 ・家庭や関係機関、幼小中との連携 ○ 共生の心の醸成 ・インクルーシブ教育システムの構築 ・すべての児童が存在意義、有用感を感じる学級学校づくり	・医療機関や療育機関、幼稚園・認定子ども園、保育所、また、中学校や特別支援学校とも連携を図り、より効果的な支援に向けた相談や保護者面談を進めた。 ・校内支援委員会を定期的に、また必要に応じて開催した。 ・個々の専門性を高めるために、配慮を要する児童についての研修会を行った。 ・平素の授業や学校行事、啓発授業において、認め合える仲間づくりや、個々の児童の特性に合った活動への配慮に努めた。 ・児童の抱える課題は多岐に渡るため、特性に応じた適切な支援について、今後さらに合意形成を図る必要がある。	B	・発達障害等に関する基礎的な知識や対応スキルを全教職員が習得するための校内研修や、個々の専門性を高めるための研修を今後も継続する。 ・早期に個別的教育支援計画・個別の指導計画を作成し、個々のニーズに応じた支援ができるようにするとともに、よりよい支援体制について考える。 ・配慮や支援を要する児童に対し、全教職員の共通理解にもとづくきめ細やかな支援を行うために、校内支援委員会のより良い開催の仕方を考える。 ・認め合える仲間づくり、共同学習のあり方の創意工夫に努める。
健康・安全 防災教育	○ 健康づくり ・給食時等における感染症対策の徹底 ・必要に応じた手洗いマスク換気の励行 ・「保健だより」「給食だより」による啓発 ○ 安全指導 ・登校時の並び方や下校のマナー、安全な遊び等、自分の命や安全を守る指導と啓発 ○ 防災・防犯指導の充実 ・さまざまな避難訓練(火災、地震、水害)および防犯訓練の充実	・掲示物や児童集会などにより、手洗いやマスクの励行については、こまめに呼びかけた。また、委員会活動として、窓あけがしなくなる工夫も取り入れた。 ・児童玄関の掲示や各教室を回っての給食指導、給食委員会の放送や食に関するホームページなど、児童が食に対して関心を持てるように取り組んだ。 ・担当教員との一斉下校で、こども110番の場所や危険個所を確認した。 ・交通旗の持ち帰り、使用を呼び掛けた。 ・防災訓練については火災、地震、増水時の通学路の確認等を行った。しかし、引き渡し訓練は感染症対策のため、また、不審者対応訓練についても、今年度は実施を見送った。 ・地域総合防災では消防署と連携し、5年生を中心に煙・水消火器・起震車体験などを行った。	B	・冬季は手洗い石鹸の減りが鈍く、手洗いが不十分であると感じた。やはり、手洗いは最も大切な予防法であるので、要所要所で行えるよう指導していきたい。 ・委員会活動としての業間・昼休みの窓開けの放送などの徹底をする。 ・SDGsの観点からも、毎日の食事に対して感謝の気持ちを持ち、残食を減らすとする意識を育てたい。 ・交通旗の適切な使用、安全な登下校について、今後も折に触れ伝えていくことで、事故防止につなげていく。 ・訓練がマンネリ化しないよう、様々な状況で「考え判断する」訓練を実施する。
家庭・地域との 連携	○ 家庭との連携 ・子どもたちの望ましい生活・学習習慣づくりを推進するための家庭との密な連携 ○ 地域との連携 ・「ふるさと三樹」を愛する心情の育成 ・学校の様子や取組の積極的な公開 ・外部人材を活用した人材バンク(仮称)づくり ○ 幼稚園・子ども園・中学校との連携	・感染症対策と行事の実施方法を工夫しながら、分散授業参観や入替制による三樹っ子運動会、音楽会などを実施した。 ・校外学習や環境体験、花植えなど、地域を知り、地域の方とふれあう機会を設けた。 ・「すぐーる」を使って健康観察や学級閉鎖等の緊急な連絡を行うことで、迅速な配信ができた。 ・これまで白黒だった学級通信をカラーで印刷することにより、児童の様子がより保護者に伝わりやすくなった。 ・「外部人材活用バンク」を作成し、継続的に地域人材を活用できるよう努めた。 ・コロナ禍により、幼稚園・こども園・中学校等との連携は困難であった。	A	・家庭とのより良いつながり方について、行事等も見直し、検討、実施していく。 ・通信やホームページ、すぐーる等を活用し、学校の様子を積極的に公開していく。 ・地域の良さやふるさとの良さを実感できる取組を、地域の方を外部講師に招くなどの方法で進めていく。 ・幼稚園・子ども園・中学校との連携・交流を深めるために、連携先と相談しながら、新たな取組を考えていく。 ・「やさしい日本語」活用をはじめとし、すべての子どもたちの生活面・学習面の不安を取り除く支援体制を整えるよう努める。

## 4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

・学校職員、児童、保護者の3者を対象にアンケートを実施しており、その結果を数値化し、経年変化をみながら評価基準に照らして総合評価している。また、保護者と児童のアンケート結果をグラフ化し、比較することにより実態をよりの確に把握しようとしている。3年目のコロナ禍で、教育活動に様々な制限がある中、工夫された教育活動や方法を柔軟に取り入れ、児童や保護者、地域へ働きかけ、その結果を加味しながら自己評価している。保護者の意見にはアンケートの内容に対する意見も散見されることから、内容の見直しが必要な項目もあるが、自己評価方法は概ね適切である。  
・数値化を図ることで、視覚的な明確さと経年の推移を比較しやすいよう工夫されている。また、その数値の算出は、学校・児童・保護者からのアンケート結果を反映していることから幅広い公正なものであり、評価方法は適切である。

## 5 評価の観点ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
・評価Bは適切である。 ・児童、保護者アンケート結果に対する改善の方策「学習計画の作成法やタブレットを活用した学習の仕方等も指導することで、個別最適に自ら学べる児童の育成をめざす。」は適切である。 ・「腰骨タイム」の実施は評価できる。他にも健康に学業に取り組むための施策に期待する。 ・「新学習機材の登用等、指導要領の10年毎の改定への対応もあり大変だと感じる。しかし基本は「個々の会得」であり「自らの習得への誘導」であるので、これを理解できないと進めない、これを使いこなせないと完結できない、尚且つそれが傲慢ではない自己主張できる考え方の基礎になると言う意識づけの指導に一層の努力を期待する。 ・学級閉鎖時にタブレットを使用し、授業等の遅れがないようしっかりとした授業補充ができていた。ただ、保護者がタブレットの使用方法を理解していない点があると感じたので、保護者に対する説明会等が必要と感じた。 ・タブレットを使ったドリル学習は定着させているが、教職員の皆様がさらにステップアップした活用方法について苦勞されているのが伺える。自己評価を厳しくされているが、教職員間の課題、問題点などの情報を共有する中で、AI教材等の活用事例研修及び技能習得に尽力頂きたい。「わからないことがあれば、自分で調べたり、家の人や先生、友達に聞いたりして、進んで学習すること」に課題があるが、保護者との連携を図り、児童の自主性を育む取組についても注力頂きたい。
・評価Aは適切である。 ・視点を整理して、計画的で全校的な取組が実施され、保護者参加型の新たな試みで人権・道徳教育を推進している。多様性と包摂性のある学校風土を構築するための取組が着実に進んでおり、職員研修では、性自認や多文化共生に係る児童への取組も継続して進められている。 ・人権は個性の尊重です。意見の違いは人の数だけある。一度運用が始められればそれを固く遵守して「変える事は悪」の様な硬直した考え方に陥らない指導をお願いしたい。 ・親子で一緒に取り組む課題等で学校と家庭の連携を図り、適切な指導ができています。 ・社会情勢の変化が著しく大変ですが、がんばってください。
・評価Aは適切である。 ・感染症対策を講じながら行事や活動を工夫し、その成果が児童の満足感や保護者アンケートの肯定的評価に現れている。地域との交流・連携の中で「ふるさと三樹」を意識した教育活動を展開しようとしている点は今後の教育活動に新たな広がりを感じさせる。 ・教室での勉強以外になされる活動は「共有感」「一体感」と「達成感」の熟成である。甲子園に出場するチームは全員同じ技量では無くレベルや得意・筋力・センスと多様に評価があつて「強さの結晶体」となっている。そう言う意識づけについての挑戦を期待する。 ・教職員の努力によりコロナの感染状況を見極めながら、多くの学校行事を実施できたことは大変良かったと思う。子供たちの満足感や達成感を得ることができ、保護者から学校生活を楽しんでいる様子が見れて感謝の気持ちを強く感じる。ただし、学校・児童評価において、若干数値が下がっているのが気になる。 ・タブレットのネットモラルにも触れる等、先を見据えた改善の方策は評価されるものである。
・評価Bは適切である。 ・「笑顔であいさつできる三樹っ子」に向けて、学校と家庭・地域が連携して取り組み、少しずつ改善の兆しが見えつつある。「あいさつ」は児童の内面を表す一つのサインと捉え、日頃の児童観察を大切にしている。 ・三樹小の子はあいさつができていとの声を多く聞いたり、取組の成果は実いていると思う。 ・保護者アンケートの自由記述の内容についても真摯に受け止め、適切に対応している。 ・今は世帯毎に大きく家庭状況が異なる。生活の中で、緩むことができれば家庭、仲間がいの学校、知人たちとの地域コミュニティ、この違いを小さな頃から身に付けられる様にお願いしたい。 ・保護者意見等に先生方の普段の努力に対する謝意があり、児童の成長に寄り添ってくれていることを感じた。「挨拶がない」との厳しい意見もあることから、大人から積極的な挨拶をする等改善が必要であると感じた。 ・あいさつ運動については、毎年、継続的に実施している効果が現れ、学校・児童・保護者とも微増ながら数値が上がってきたことは、大変評価ができる。 ・児童の「楽しく学校にいらっている」の評価数値が下がっているのが気になる。保護者アンケートの自由記述には、いじめの実態も見受けられる。これらの問題については、教職員の共通理解、保護者との連携はもとより、些細なことでも、児童に耳を傾け、いじめのシグナルを読み取る体制づくりに取り組まれた。 ・先生と児童のさらなるコミュニケーションの深化に期待する。
・評価Bは適切である。 ・関係機関や幼稚園・子ども園、保育所、中学校や特別支援学校との連携を図り、児童の教育的ニーズに応じた「適切な指導」と「必要な支援」について研修を深め、教職員の専門性を高めている。 ・個々のニーズに応じた支援のため、左記改善の方策の展望に期待する。 ・一般生徒も含めた学校全体に対しての意見になる。「優しさは強さの現れである」この意思を植え付ける事で根本的な上滑りの無い共存ができると思う。 ・関係機関や幼小中との連携を図り、より効果的な支援に向けた相談や保護者との面談を進める一方、配慮や支援を要する児童について、教職員で共通理解を図るため、校内支援委員会を定期的に開催されている。よりきめ細かな支援のため保護者との相互理解を十分に図って頂きたい。 ・安心できる旨の意見があり、素晴らしい対応ができていていると感じた。
・評価Bは適切である。 ・昨年度に引き続き、評価基準に照らした評価点の数値は良好である。 ・「交通ルールを守り、安全な登下校」や「早寝・早起き・朝ごはん」の習慣化は地域や家庭とも連携して取り組むことで、より改善を図ってほしい。 ・これは言わずもがな、健康であって、事故のおきない・おこさない意識、事があった時にどう行動すべきかを何度も反復して教えてやって欲しい。 ・マラソン大会後等の行事後に学級閉鎖が相次いだ旨の厳しい意見もあり、さらなる感染対策の徹底が必要であると感じた。 ・学校が4項目、児童が4項目評価を下げているのが気になる。特に安全指導、防災・防犯指導は児童の命を守る大切な取組であるので、地域、関係機関、保護者との連携を密にして実施頂きたい。 ・健康、安全、防災は恒常的に実施するためマンネリ化は免れないが、それを打破するべく…防災、不審者訓練を適宜取り入れ、要所でねじを締め直し…来年度は、コロナ対策が緩和されるため、各施策への取組に期待する。
・評価Aは適切である。 ・紙媒体の学校通信やホームページ、「すぐーる」等を効果的に活用し、保護者や地域「人の目の垣根」などの情報共有が適時行われており児童の安全や地域とのスムーズな連携に繋がっている。 ・学級通信をカラー印刷する等、細かな点を改善、実行しているところに学校が常に問題意識を持ち、受け身になっていないことがうかがえる。 ・食育と言う言葉もあるように、本来家庭に帰すべき事は「親の教育」の含めであるべきだ。総じて今の日本に必要なのは、継続の為の大局より、継続を止める決断が必要と言う事だ。 ・地域の良さやふるさとの良さを実感できる取組を進めようとしている点は適切である。 ・感染対策を講じながら、行事の実施方法を工夫し、分散授業参観、入替制による三樹っ子運動会、音楽会等の実施や、校外学習や鉢植えなど、地域を知り、地域の方とのふれあう機会ができたことは評価できる。コロナ禍での連携は工夫して実施してほしい。 ・三樹小学校の特色を押し出し、家庭への理解を求めることも必要であると感じた。